

研究授業通信

古枝小学校
研究主任 松林 諒
令和四年度 12月1日

5年生「跳び箱運動」

最後の授業研究は、5年生の「跳び箱運動」を行いました。

3つの研究内容について、事後検討会で出た意見をもとにまとめました。

研究内容①「学習カード」

跳び箱運動 学習カード

名前: _____

のり: _____

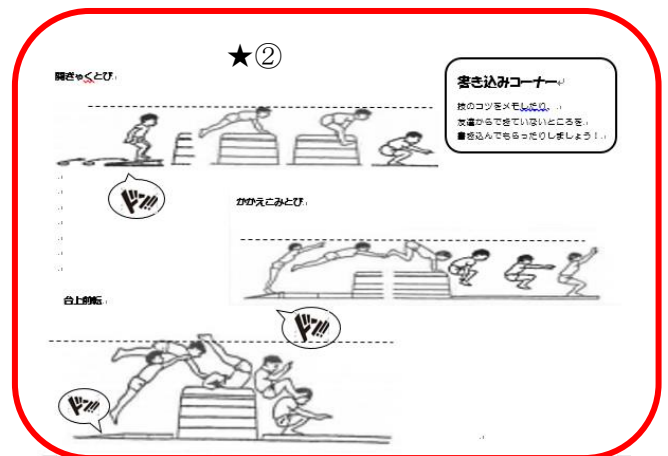
今日のめあて: _____

めあて①	技	段	ふみきり	友達のサイン①	②	★①
めあて1 を揃やそ う!	技	段	ふみきり	①	②	
めあて2 揃やそ う!	技	段	ふみきり	①	②	

振り返り次のめあて

①

②



- ★① 友だちとの学び合いは、児童が「必要感」を持っていることが大切です。これまでは、もう少しでできそうな技（めあて2）に取り組む際に、同じ技に取り組む児童同士の学び合いや上手な児童からのアドバイスが「必要感」のある学び合いとして児童に期待するところでした。しかし今回は、めあて1を「技のきれい・かっこいいを目指そう」とし、相手意識を持たせることで、めあて1の技のできばえを高める段階でも、『友だちと教え合いながら活動する』ことを児童に価値づけられていました。本時の中では、めあて1での教え合いを積極的に行っている児童は少なかったようでしたが、児童の実態・学級の実態に合っており、教師の意図も明確なので、次時以降の活動の中では増えてくると感じました。
- ★② 4年生・6年生の実践では、形態図を壁面に掲示し、それぞれの児童が技のコツを書き込むことで、思考を促し間接的な学び合いをねらうものでした。今回は、個人のワークシートに形態図をつけることで、学び合いの際に友だちから気付きを書き込んでもらいながら説明してもらったり自分なりのコツを書き込んだりするというものでした。どちらもそれぞれにメリットがあると思うので、学級の実態や教師のねらいに応じて使い分けることができると感じました。

研究内容②「めあて・ふり返り」



- ★③ 『めあて1とめあて2を自分で選択できる』
めあて1に取り組む児童は白帽子
めあて2に取り組む児童は赤帽子
その他にも、デジタルタイマーを使って残り時間を知らせたり、ネーム磁石を使って掲示させたりする方法もあります。



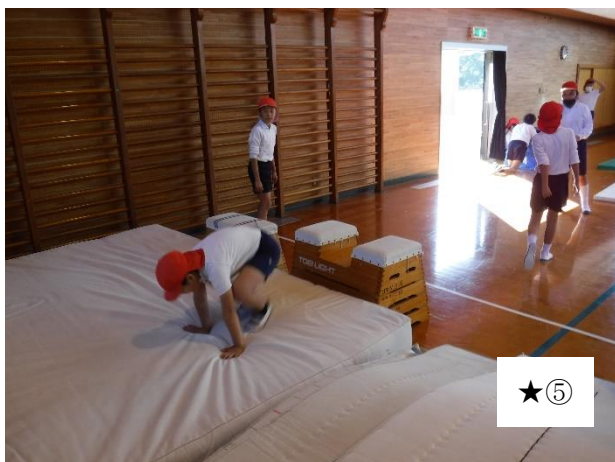
★④『ふり返りを書く前に、児童の取り組みを紹介する』他の児童の取り組みを紹介するだけではなく、「どのようなことに気が付いたんですか?」「見ていた皆さんは、どんなことに気が付きましたか?」「〇〇に注目して見ておいてくださいね。」などの声かけ・問いかけをすることでより協働的な学びの質が高まります。

★③に関連して 単元の後半から、一時間の活動時間を児童自身がタイムマネジメントできるようにしました。めあて1とめあて2の活動時間や順番を自分で決められることによって、より個別最適な学びを実現できるようにしました。また、めあて1とめあて2が混在する状況にすることで、児童同士の学び合いがより活性化されることを期待していました。これらの工夫により、児童は大変主体的に活動していました。一方で、教師の見取りや支援が難しくなることが課題としてあげられました。活動の場を技ごとに固定することや事前に児童のめあてを把握しておくなどの手立てが考えられるかと思えます。発達段階や学級の実態に応じて、ステージ型（めあて1とめあて2を時間で区切る）とスパイラル型（めあて1とめあて2を行ったり来たり）を使い分けるといいかと思えます。

★④に関連して 本時の活動を終えて、新しい技ができるようになった児童と友達からカッコいい認定をもらった児童の技を紹介し、「どんなことに気を付けましたか?」と問いかけることで技のコツを全体で共有されていました。そのことを踏まえてそれぞれのふり返りを書くようにすることで協働的な学びを実現されていました。紹介する児童についても、児童が児童を推薦したり、ぜひ自分がという児童に技をしてもらったり、いろいろな方法があると思えますが、教師が意図的に指名することで、その時間に価値付けたいことを全体に共有することもできますね。

※ ふり返りの時に、本時の活動の中で『困ったこと』がなかったかを児童に聞くことがあります。1年生の実践で行われていたように、場の設定のことやマナー面、ルール等について、学習の中で困ったことがなかったかを児童に問い、みんなで考えながら学習を進めることは、とても大切な協働的な学びだと思えます。今回の5年生の実践でも、児童からの困り感を取り上げ全体で共有したり、教師が感じた児童の困り感を全体で共有したりしながら学習を進めていくことも大切なのではないかという意見もいただきました。何度も練習しているが一向にできるようにならないことも運動を楽しめない大きな困り感になりますので、個人の困り感をみんなまで考えていくことも「個→協」「協→個」につながると感じました。

研究内容③「教材・教具」



★⑤自分たちの課題（必要感）に応じて、自ら工夫した練習の場を準備する姿が見られました。児童の活動の様子やこれまでのふり返りをもとに、教師から工夫された場を提示してあげることが基本になるかと思えますが、そういった学習を積み重ねていくと、「先生場所を変えてもいいですか?」という児童が現れてくるのかと思えます。



★⑥跳び箱を跳んだ後の『待つ場所』を工夫することで、自然と友達の技を見る、友達に見てもらおう（見られている）という意識が高まりました。見ていた児童が自然と声を掛けたくなるような場の工夫がされていました。

※本時では、児童がそれぞれの必要感に応じて場を工夫する姿があり、主体的な学びが行われていました。工夫された場を作るためには、跳び箱以外にもいろいろな教材を使うことができます。本時ではたくさんのマットが余っていましたし、体育館のステージやお手玉などを使うこともあります。教師も児童も気軽に見ることができる「場づくりアイデア集」のようなものがあるといいというご意見をいただきましたので、冬休みにでも作れたらと思っています。

これで、今年度の研究授業は終わりになります。先生方、大変お疲れ様でした。今後は、武道等事業に係わる「器械運動領域の学習カード作成」や「今年度の研究の振り返り」「来年度の研究の検討」を行っていきたいと思います。

これからの予定

12月14日（水）	器械運動領域の学習カード作成（冬休み中に完成）
1月18日（水）	これまでの成果と課題の報告と次年度の研究について
2月1日（水）	次年度の研究について提案①
3月24日（水）	次年度の研級について提案②